

# 大学生の「甘え」と特性 5 因子の関係

玉瀬 耕治・相原 和雄\*  
(奈良教育大学心理学教室)

## Relationships between Students' AMAE and Big- Five Personality Traits

Koji TAMASE and Kazuo AIHARA  
(Department of Psychology, Nara University of Education)

**Abstract :** According to Doi's AMAE theory, it was predicted that there is some relationship between students' AMAE and Big-Five as personality traits. A new rating scale to assess the state of students' AMAE was developed on the basis of a previous study by Tamase and Wakimoto (2003). The AMAE scale consisted of 20 items, which constituted 4 subscales: AMAE-Desire, AMAE-Acceptance, AMAE-Contortion, and AMAE-Rejection. The first two subscales were supposed to evaluate interdependent aspects of AMAE, whereas the last two subscales were supposed to evaluate distorted aspects of AMAE. One hundred and twenty-four undergraduate students participated as the rater who rated the AMAE scale (20 items) and an abbreviated form of Big-Five; Neo-PI-R, NEO-FFI (60 items). It was found that there were significant positive correlations between AMAE-Desire and neuroticism (N), between AMAE-Acceptance and N, extroversion (E), or agreeableness (A), between AMAE-Contortion and N. It was also found that there were significant negative correlations between AMAE-Desire and openness (O), between AMAE-Contortion and O or A, between AMAE-Rejection and E, O, or A. The implication of these findings was discussed in line with the predisposition of Japanese culture.

**Key Words :** AMAE 甘え, Big-Five Factor Theory 5 因子論

### 1. 問題と目的

日本人にとって、「甘え」という言葉はどのような意味をもつのであろうか。多くの人が「あの人は甘えている」とか「あなたの考えは甘い」などのように、日常的に「甘え」という言葉を用いている。それは、必ずしも好ましい状態を表すものとして用いられているとはいえない(篠原, 1997; 篠原・原崎, 2003)。一般的には、「甘え」は社会的な未成熟や対人的な依存性などを示すものと考えられている。しかし、この概念は精神科医の土居健郎によって、日本人特有の対人行動や対人感情などを理解するための鍵概念として重視され、精神医学的に重要な意味をもつものとみなされてきた(土居, 1971, 1985, 1993, 2001)。土居(2001)は、甘え概念の最も簡単な定義として、「人間関係において相手の好意をあてにして振舞うこと」であると述べている(p65)。人をあてにすることは好

ましいことなのか、好ましくないことなのか。この点は、日本社会という文化の中に存在する暗黙の共通理解のいかんによって決まることになるであろう。

この問題については、実証的な研究を重ねつつ、慎重に文化としての本質を探っていかなければならない。元来「甘え」とは、他者に愛され、他者と一体になろうとする欲求であり、子どもが親、特に母親と接するときの態度や行動に示されているものである。土居はこの「甘え」を日本語固有の語彙であるとした上で、母子関係だけではなく、大人同士の対人関係においても広く認められると考えた。Markus and Kitayama (1991)は、相互協調的な人間関係を基盤とする日本においては、相互独立的な価値観をもつ欧米に比べて、特に「甘え」が発達したと考えている。そこには日本人が集団行動を好み、他者と異なることを避け、自分自身が平均的(中庸)であることをもってよしとする文化的背景があるとみなされる(北山・唐澤, 1995)。

「甘え」と関連して、「タテ社会」(中根, 1967)

\* 現在 奈良教育大学大学院教育学研究科在籍

「日本的自我」(南, 1994)、「相互協調的自己」(高田他, 1996、木内, 1996、北山・宮本, 2000)などの用語が用いられ、社会心理学や文化心理学、比較文化論の観点から研究が進められてきた。とりわけ、土居の「甘え」の概念は、日本人特有の対人行動や対人感情を理解する上で重要なものとみなされているが、「甘え」が独特の定義(土居, 1971, p.82)や曖昧な表現によって規定されているため、今日まであまり実証的研究を促すことにはならなかった。従来の研究を踏まえつつ、土居の示唆した「甘え」に関する実証的研究を発展させることは、日本人の感情や意識のあり方、文化的特質を論ずる上できわめて意義深いと考えられる。

玉瀬・脇本(2003)は「甘え」を数量化するために、大学生用「甘え」尺度を作成した。この尺度を作成するにあたり、彼らはまず甘えに関する最初の実証的研究とされる藤原・黒川(1981)を参考にした。藤原・黒川は、どのような状況下で誰に対して甘えがより強く表出されるのかを問題にしている。彼らの尺度は、「甘え」を表す10語の動詞(あてにしたい、たのみにしたい、すがりたい、まかせたい、相談したい、甘えたい、なんとかして欲しい、言わなくても分かって欲しい、慰められたい、後押しをして欲しい)を用い、特定の状況、特定の対象人物についてどの程度そう思うかを5段階で評定させたものである。玉瀬・脇本(2003)は、上述の10個の動詞からいくつかの状況において大学生などに当てはまると考えられるものを選び、対象人物(親、友達、先輩等)を限定して、それらについて「どの程度そう思うか」を4段階で評定させる尺度を作成した。また、玉瀬・脇本は、これまでの研究では「甘え」を自己からの甘えという方向からしか捉えていないことを指摘し、他者から「甘えられたい」感情についても測定することを付加した。「甘えられたい」とは土居の定義を用いるなら、「自分の好意をあてにして他者に振舞ってもらいたい」とする感情のことである。このように、玉瀬・脇本(2003)の尺度には、「甘えたい」という側面と「甘えられたい」という側面を捉える2つの下位尺度を含むものとして構成されている。日本社会の相互依存的もしくは相互協調的な人間関係を捉える尺度としてはより適切なものになったと考えられる。

玉瀬・脇本(2003)の大学生用「甘え」尺度は、「甘え」下位尺度13項目、「甘えられ」下位尺度11項目の計24項目からなる尺度である。ただし、「甘えられ」下位尺度の項目は、「甘え」下位尺度の項目に対応づけて選ばれたものであり、独自に因子分析を行って尺度構成したものではない。この点については、さらに検討を行う必要があると考えられる。

ところで、土居の甘え理論では、甘えたくても甘えられないという状況に陥ると、人間は相手に対して

「うらむ」や「ひねくれる」「すねる」等の感情を引き起こすことを示唆している(土居, 1971)。さらに土居(2001)は、「甘えには健康で素直な甘えと自己愛的で屈折した甘えがある。前者は相手との相互的な信頼を軸にした甘えであるが、後者は一方的な要求の形をとった甘えである」としている(p109)。玉瀬・脇本(2003)の「甘え」「甘えられ」という捉え方は、相互依存的な人間関係の上に成り立つむしろ健康的な甘えであると推測される。「甘え」をさらに多面的に捉え、数量化する上では、このようなうらみ感情や屈折した甘えにも焦点をあてることが重要であろう。

本研究では玉瀬・脇本(2003)の作成した大学生用「甘え」尺度を見なおし、「甘え」がより健康的なものと屈折したものの2群に分かれることを想定して、「甘え」を多面的に捉える新たな尺度を作成することを一つの目的とした。

本研究のもう一つの目的は、「甘え」と性格特性との関係を明らかにすることであった。土居は「甘え」を日本人の感情の根幹をなすものとみなしているが、それは個人差としての性格特性とどのような関係があるのだろうか。性格研究については最近では5因子説への関心が高まっている(辻他, 1997)。5因子モデル(Five Factor Model)もしくはビッグ・ファイブ(Big 5)と名付けられたこの領域の研究は、Allport and Odbert(1936)が辞書的アプローチによる研究を行ったことに始まるとされている(下仲他, 1999)。以後Cattell(1947)、Norman(1963)、Eysenck(1967)などの研究を経て、Goldberg(1990)により5因子モデルとして完成した。性格(人格)を構成する5つの次元は、研究者によってその表現や解釈が若干異なるが大意としては類似している。Costa and McCrae(1985, 1989)によって開発されたNEO-P-Iの日本語版NEO-P-I-Rの定義によると、5因子とは、神経症傾向(N: Neuroticism)、外向性(E: Extraversion)、開放性(O: Openness)、調和性(A: Agreeableness)、誠実性(C: Conscientiousness)の5つである。神経症傾向(N)とは、情動の過敏性を示す傾向、ストレスに対して精神的混乱を引き起こしやすい傾向のことである。外向性(E)とは、心的エネルギーが他者や物などの客体に向けられている性質を示す。開放性(O)とは内的・外的世界に対する好奇心や関心の度合いを示す。調和性(A)とは周囲との協調性の度合いを示すものである。そして誠実性(C)とは、物事の計画性や実行性の堅実さを示す自己統制に関係する次元である。これら5つの性格特性と「甘え」がどのような関係にあるのかを検討し、「甘え」の性格特性上の位置づけを行うことは、甘えの実態を特定していく作業として意味があると考えられる。

## 2. 方 法

本研究では、「甘えたい」「甘えられたい」という相互依存的な甘えと、「うらみしたい」「一方的に甘えたい」などの屈折した甘えの2種類を想定している。

### 2. 1. 「甘え」「甘えられ」下位尺度の改訂

玉瀬・脇本（2003）の大学生用「甘え」尺度を基にして、藤原・黒川（1981）、大迫・高橋（1994）、高田・松本（1995）らを参考にしながら「甘え」下位尺度20項目、「甘えられ」下位尺度17項目を作成した。これらの下位尺度の作成過程について以下に述べることにする。

玉瀬・脇本は、藤原・黒川（1981）の研究を参考に、大学生にとって感情を表出しやすい対象人物（親、先輩、友人等）を設定し、困った状況と甘え感情を示すとされる動詞を組み合わせ、まず「甘え」下位尺度を作成した。次に、甘えの表現を受身的に変更することで「甘えられ」下位尺度を作成した。すなわち、自分が相手に甘えを求める表現から、相手からの甘えを求める表現に変えたのである。本研究でも基本的に同様の作業を行った。ただし、最終的にどの項目を残すかに関しては、分析の過程が異なっている。対象人物については、玉瀬・脇本（2003）のようにタテ関係の人物（親、教官、先輩）とヨコ関係の人物（友達）を区別せず、多様な対象人物に当てはまる表現（「親しい人」や「信頼のできる人」）とした。他者に対して「甘えたい」と考えられる状況については土居（1971、2001）を参考にした。このようにして、まずは「甘え」22項目、「甘えられ」21項目を作成した。その後、対象人物が限定されすぎる項目や、表現上の問題や定義との兼ね合いなどから適切でないものなど、「甘え」下位尺度から2項目、「甘えられ」下位尺度から5項目を削除して、最終的に「甘え」下位尺度20項目、「甘えられ」下位尺度17項目を残した。

### 2. 2. 「屈折した甘え」に関する項目の追加

うらみ感情を表す語は、土居（1971、2001）や藤原・黒川（1981）の「甘えられないことによる被害者意識」を表す動詞から「うらみしたい」「すねたい」等を引用し、これらの感情によって引き起こされる「腹が立つ」を加えた9つの動詞と、藤原・黒川の11状況を組み合わせたものの中から選択した。さらに土居（1971、2001）を参考に今回独自に考えた状況も加え、最終的に14項目を採択した。

「一方的な甘え」を表現する項目に関しても土居（2001）や高田・松本（1995）らを参考に、まず22項目を作成した。「甘え」「甘えられ」「うらみ」との対応や対象人物の問題、表現上の問題などを考慮して最終的に18項目を残した。

### 2. 3. 材 料

「甘え」尺度...69項目：「甘え」20項目、「甘えられ」17項目、「うらみ」14項目、「一方的甘え」18項目で構成されている。

NEO-FFI (Big5：短縮版NEO-PI-R性格検査用紙)

Big5性格検査用紙NEO-PI-R (Revised NEO Personality Inventory) は、5つの次元と各次元を構成する6つの下位次元で構成され、240項目から成る。本研究で使用したNEO-FFIとは、240項目の内60項目から構成された短縮版である。NEO-PI-RとNEO-FFIとは、因子ごとに相関係数が $r=.82 \sim .92$ という高い相関関係にあり、またNEO-FFIの因子ごとの係数は、N ( $=.83$ )、E ( $=.78$ )、O ( $=.75$ )、A ( $=.68$ )、C ( $=.77$ ) で内的一貫性があるといえる。評定は「非常にそうだ」(4) から「全くそうでない」(0) までの5段階評定であり、得点範囲は各因子0～48点、総点0～240点である。

### 2. 4. 調査対象者

本研究では、教員養成系大学生124名（男30名 女94名）を対象とした。平均年齢は19.4歳 ( $SD=0.65$ ) である。

### 2. 5. 手続き

筆頭著者の講義時間の一部を用いて集団的に調査を実施した。調査者（第2著者および協力者）が調査対象者に質問用紙を配布した後、用紙枚数を確認し、まず日付、性別、年齢などを記入するよう求めた。記入し終わった時点で、「甘え」尺度およびBig5性格検査用紙の項目について解答を求めた。「甘え」尺度については例に従って図示された区切りの上に、「いつもそう思う」「ときどきそう思う」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の4段階で評定するように教示した。調査は平成14年6月に実施した。結果の集計が終わった段階で、講義時間中に結果の概要について調査対象者への報告を行った。

## 3. 結 果

### 3. 1. 多元的「甘え」尺度の作成

各項目の評定に4点（いつもそう思う）から1点（全くそう思わない）までの得点を与え、各項目の得点を以下の分析に使用した。

#### 3. 1. 1. 因子分析

「甘え」尺度全69項目に関して、もともと「甘え」「甘えられ」「うらみ」「一方的」の4因子構造を想定して作成したので、4因子での確認的因子分析を行った。最初の段階では、主因子法バリマックス回転を行った結果、累積寄与率は29%となり4因子構造を示さ



なかった。そこで主成分分析を行い、固有値1以上の因子を調べた結果、11因子にもなっていることが分かったので、不適当な項目を削除することにした。その基準として、「甘え」から「一方的」までの4因子内で係数を取りつつ、各因子における各項目のI-T相関値（部分-全体相関値）を確認し、低いものから順に削除しつつ、分析を繰り返した。その結果、各因子10項目の段階で「甘えられ」と「一方的」において因子負荷量.40以上のまとまりをみせた（累積寄与率37%）。しかし、「甘え」と「うらみ」においてはこの段階でまとまりを見せなかった。

そこで、再度「甘え」尺度全69項目にもどって因子分析をし直すことにした。今度は上述した土居（2001）の定義により、甘え、甘えられを「相互依存的な甘え」、うらみ、一方的を「屈折した甘え」と捉え、それぞれについて因子分析を行った。まず「相互依存的な甘え」37項目に対し、主因子法バリマックス回転を行った結果、累積寄与率22%で2因子が抽出された。そこで再び係数を確認しつつ、I-T相関値の低い項目や因子負荷量が2因子にまたがっている項目を順に削除していった。その結果、最終的に2因子5項目ずつが抽出された（累積寄与率35%）。これら2因子は「甘え」

と「甘えられ」に相当する。係数を確認すると、「甘え」=.74、「甘えられ」=.72であった。同様の手順で「屈折した甘え」の32項目についても主因子法バリマックス回転を行った。その結果、まずは累積寄与率31%で2因子が抽出された。I-T相関値の低いものを順に削除していき、最終的に2因子で5項目ずつが抽出された（累積寄与率45%）。これら2因子は「うらみ」「一方的」に相当する。係数は「うらみ」=.79、「一方的」=.80であった。

最終的に抽出された全20項目について、4因子でバリマックス回転を行った結果、累積寄与率45%で4因子としてまとまった。全体の係数は.77であり、I-T相関値は $r=.42 \sim .65$ の範囲であった。第4因子について、独立した因子として扱うことに若干の危惧があったので、主成分分析における第4因子の固有値を確認すると0.91であった。これは比較的1に近いものと判断される。また、もともと4因子構造で因子分析を行い、45%という比較的高い説明率をもっているということで、この「甘え」尺度は4因子各5項目ずつ、計20項目の尺度とすることにした（表1）。

因子名については、項目内容を検討し、適切に尺度の特徴を表現しうるものとして下位尺度名を次の通り

表1 本研究における「甘え」尺度項目の因子分析結果（バリマックス法） N=124

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	平均	SD
<b>「甘え希求」(<math>\alpha=.74</math>)</b>						
・授業について行けないときは、誰かに助けを求めたい。	(0.03)	0.09	0.63	0.12	3.24	0.73
・勉強が上手く行かないときは、誰かを頼りにしたくなる。	(0.01)	0.15	0.70	0.01	3.10	0.76
・サークル活動がうまくいかないときは、誰かに何とかしてもらいたい。	0.15	0.21	0.52	0.06	2.53	0.89
・友達とけんかをしたときは、他の友達に何とかしてほしい。	0.35	0.01	0.56	(0.06)	1.98	0.80
・自分が何か新しいことを始めるときは、誰かに後押しをしてほしい。	0.32	(0.02)	0.59	0.24	2.57	0.90
合計得点					13.42	2.87
<b>「甘え受容」(<math>\alpha=.72</math>)</b>						
・友達が将来どの職業につくべきか迷っているときは、自分が相談にのってあげたい。	(0.10)	0.11	0.15	0.67	2.97	0.72
・身近な人の体調が優れないときは、自分をあてにしてほしい。	(0.05)	(0.01)	(0.04)	0.55	3.10	0.67
・友達が勉強で行き詰まっているときは、自分が相談にのってあげたい。	(0.11)	0.20	0.22	0.59	2.71	0.76
・友達の日常生活に張り合いがなさそうときは、自分が相談にのってあげたい。	(0.12)	(0.05)	0.18	0.52	2.88	0.66
・親しい人が落ち込んでいるときは、自分が慰めてあげたい。	(0.12)	(0.01)	(0.07)	0.54	3.32	0.70
合計得点					14.98	2.41
<b>「相互依存的甘え」(希求+受容)</b>					28.40	4.05
<b>「甘え歪曲」(<math>\alpha=.79</math>)</b>						
・サークル活動がうまくいかないとき、リーダーが努力をしてくれないと腹が立つ。	0.03	0.51	0.15	(0.01)	2.51	0.90
・身内にわがママをきいてもらえないと、ふてくされてしまう。	0.13	0.71	(0.02)	0.05	2.23	0.83
・自分の要望が通らないときは、ついつい相手をうらむことがある。	0.31	0.62	(0.02)	(0.07)	2.02	0.78
・親しい人が自分の好意に応えてくれないと、すねてしまう。	0.19	0.73	0.15	0.17	2.31	0.78
・周りの人が私の努力を認めてくれないと、ふてくされてしまう。	(0.02)	0.70	0.17	0.03	2.52	0.73
合計得点					11.58	2.97
<b>「甘え拒絶」(<math>\alpha=.80</math>)</b>						
・他人には私の気持ちを察してほしいが、自分はそうしたくない。	0.70	0.20	0.07	(0.14)	1.63	0.62
・勉強がうまくいかないときは誰かに助けてほしいが、私は誰かから助けを求められたくはない。	0.57	0.07	0.11	(0.34)	1.87	0.69
・自分はある程度約束をすっぽかすことがあっても、他人にはそうされたくはない。	0.64	0.06	0.17	(0.09)	1.77	0.71
・自分の考えは周りに受け入れてほしいが、周りの人の考えはあまり受け入れたいとは思わない。	0.69	0.08	0.12	(0.19)	1.56	0.57
・他人にはきつい本音を言うことがあっても、他人からは本音をいわれたくない。	0.62	0.16	0.01	(0.01)	1.70	0.80
合計得点					8.54	2.54
<b>「屈折した甘え」(歪曲+拒絶)</b>					20.12	4.41
二乗和	2.54	2.39	2.06	1.96		
寄与率	0.13	0.12	0.10	0.10		
累積寄与率	0.13	0.25	0.35	0.45		

( )表記は負の負荷量を示す

とすることにした。「甘え」下位尺度は全体の尺度名との混同を避けるためにも変更した方がいいと考えられるので、この因子は「甘え希求」因子とした。表現をこれに合わせて、「甘えられ」下位尺度は「甘え受容」因子とした。これら2つの下位尺度は希求と受容で「相互依存的甘え」を捉えるものとみなされる。「うらみ」下位尺度については、甘えを素直に表現できないことを示しており、「甘え歪曲」とした。「一方的」下位尺度については、相手からの甘えを拒否しようとするものであり、「甘え拒絶」とした。これら2つの下位尺度は土居のいう「屈折した甘え」を捉えていると考えられる。以上4つの下位尺度は「甘え」を多方向から捉えようとするものであり、本尺度は「多元的『甘え』尺度」と命名することにした。表2は多元的「甘え」尺度の各下位尺度間の内部相関の値を示したものである。

### 3. 1. 2. 上位群と下位群における平均の差の検定 (GP分析)

「甘え」尺度全20項目の合計得点について上位25%と下位25%の範囲に含まれる各32名を抽出し、GP分析を行った。その結果、全ての項目において0.1%水準で有意差が見られた。したがって、多元的「甘え」尺度の各項目は「甘え」を測定する尺度としての弁別力を備えているといえる。

### 3. 1. 3. 正規性について

「甘え希求」から「甘え拒絶」までの各下位尺度に

ついて、次のとおり正規性の確認を行った。「甘え希求」( $M=13.42$ ,  $SD=2.87$ )では、歪度.22、尖度-.33、最大値20、最小値7であった。「甘え受容」( $M=14.98$ ,  $SD=2.41$ )では、歪度-.40、尖度-.82、最大値20、最小値6であった。「甘え歪曲」( $M=13.42$ ,  $SD=2.87$ )では、歪度.21、尖度-.32、最大値19、最小値5であった。「甘え拒絶」( $M=8.54$ ,  $SD=2.54$ )では、歪度.50、尖度.21、最大値18、最小値5であった。4つの下位尺度について、コルモゴロフ・スミルノフの検定を行ったところ、「甘え希求」「甘え受容」「甘え歪曲」の3尺度に関しては、順に $Z=1.21$ ,  $Z=1.29$ ,  $Z=1.24$ で有意ではなく、分布が正規であるという帰無仮説は棄却されず、正規性が確認された。「甘え拒絶」に関しては $Z=1.46$ で $p=.03$ となり有意であったので、正規性は確認されなかった。この下位尺度では、得点が低い方に偏っている。この尺度はもともと健常者においては肯定的回答が少ないと想定されており、むしろより病理的な集団において得点が高くなる可能性がある。このように、「屈折した甘え」を捉えようとする、ある程度は反応に偏りが現われることはやむを得ないと考えられ、正規性は保証されていないが本研究では多元的「甘え」尺度の下位尺度として残すこととした。

### 3. 1. 4. 玉瀬・脇本 (2003) の「甘え」尺度との相関

本調査を行った1週間後に、同一の調査対象者に玉瀬・脇本 (2003) の大学生用「甘え」尺度を実施した。

表2 多元的「甘え」尺度の下位尺度ごとの相関

	希求	受容	歪曲	拒絶	相互依存的甘え	屈折した甘え
希求	1.00					
受容	0.17	1.00				
歪曲	0.25**	0.09	1.00			
拒絶	0.28**	-0.26**	0.28**	1.00		
相互依存的甘え	0.81**	0.72**	0.23**	0.05	1.00	
屈折した甘え	0.33**	-0.08	0.83**	0.76**	0.18*	1.00

\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$

表3 多元的「甘え」尺度と大学生用「甘え」尺度 (玉瀬・脇本, 2003) との相関

	希求	受容	歪曲	拒絶	相互依存的甘え	屈折した甘え
玉瀬・脇本の甘え	0.44**	0.34	0.03	0.23	0.52**	0.16
玉瀬・脇本の甘えられ	-0.02	0.60**	-0.19	-0.13	0.34**	-0.20

\*\* $p<.01$

表4 多元的「甘え」とビッグ・ファイブ (NEO - FFI) との相関

	希求	受容	歪曲	拒絶	相互依存的甘え	屈折した甘え
神経症傾向 (N)	0.27**	0.28**	0.37**	-0.11	0.36**	0.19*
外向性 (E)	0.06	0.29**	-0.13	-0.30**	0.22*	-0.26**
開放性 (O)	-0.19*	0.16	-0.18*	-0.36**	-0.04	-0.33**
調和性 (A)	0.14	0.26**	-0.23*	-0.47**	0.26**	-0.43**
誠実性 (C)	-0.06	0.01	0.07	0.03	-0.03	0.07

\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$

有効回答をした調査対象者は68名であった。それらの対象者について、多元的「甘え」尺度と玉瀬・脇本の尺度との相関をしらべたところ、「甘え」下位尺度と「甘え希求」尺度との間で $r=.44$ 、「甘えられ」下位尺度と「甘え受容」尺度との間で $r=.60$ の相関値が得られた（共に0.1%水準で有意）。したがって、本尺度は、「相互依存的甘え」に関して、玉瀬・脇本（2003）とある程度共通性のある尺度であるといえる（表3）。

### 3. 2. 多元的「甘え」尺度の特徴

多元的「甘え」尺度は、玉瀬・脇本（2003）の大学生用「甘え」尺度を改訂したものであり、「甘え希求」「甘え受容」「甘え歪曲」「甘え拒絶」の各下位尺度5項目、全20項目からなる。この尺度の目的は、甘え感情を相互依存的な甘えと屈折した甘えの両側面から捉えることで、日本人の感情の根幹を成すとされる「甘え」をより多元的に捉えることである。また、対象人物を特定していないことから大学生以外にも適用することができる。相互依存的な甘えと屈折した甘えの区別は、今後の調査の関心に応じて使用することができよう。

### 3. 3. ビッグ・ファイブとの関連

表4は、多元的「甘え」尺度とNEO-FFIとの相関を示したものである。「甘え希求」から「甘え拒絶」までの各下位尺度とビッグ・ファイブのそれぞれの因子との間でいくつかの有意な相関が見られた。まず、神経症傾向については「甘え希求」と $r=.27$ 、「甘え受容」と $r=.28$ 、「甘え歪曲」と $r=.37$ の相関が示されている。次に、外向性については「甘え受容」と $r=.29$ 、「甘え拒絶」と $r=-.30$ の相関が示されている。開放性については「甘え希求」と $r=-.19$ 、「甘え歪曲」と $r=-.18$ 、「甘え拒絶」と $r=-.36$ の相関が示されている。調和性については「甘え受容」と $r=.26$ 、「甘え歪曲」と $r=-.23$ 、「甘え拒絶」と $r=-.47$ の相関が示されている。また、「希求」と「受容」を合わせた「相互依存的甘え」では、神経症傾向、調和性と正の相関関係があり、「歪曲」と「拒絶」を合わせた「屈折した甘え」では、外向性、開放性、調和性と負の相関関係にあることが分かった。誠実性とは多元的「甘え」尺度のいずれの下位尺度とも相関が見られなかった。多元的「甘え」尺度の各因子の特徴とビッグ・ファイブの5因子の特徴を考え合わせると、本研究の結果はおおむね了解しうるものであるといえよう。

## 4. 議 論

本研究では「甘え」「甘えられ」を下位尺度とする玉瀬・脇本（2003）の大学生用「甘え」尺度を改訂し、新たに「屈折した甘え」に関する項目を追加して、多元的「甘え」尺度を作成した。4つの下位尺度については「甘え希求」「甘え受容」「甘え歪曲」「甘え拒絶」

と命名した。「甘え希求」と「甘え受容」は玉瀬・脇本の「甘え」下位尺度と「甘えられ」下位尺度に対応するものであり、「相互依存的甘え」を捉えようとしたものである。「甘え歪曲」と「甘え拒絶」は「屈折した甘え」を捉えようとしたものである。各因子の係数は、「甘え希求」 $=.74$ 、「甘え受容」 $=.72$ 、「甘え歪曲」 $=.79$ 、「甘え拒絶」 $=.80$ であり、尺度全体では $=.77$ であった。これらの値は十分高いものとはいえないが、内的一貫性信頼性ありとして許容される範囲にあるといえよう。

### 4. 1. 因子分析の手法

因子分析の適用に関しては、さらにいくつかの手法も考えられる。今回の因子分析では主因子法バリマックス回転を用いた。バリマックス回転は直交回転であり、因子負荷量の分散を最大にする手法である。つまり、各因子は独立の関係にあるという前提に立っている。本研究の多元的「甘え」尺度では、最終的には4因子で5項目ずつという、ある程度実用性のある尺度ができたといえる。しかし、必ずしもバリマックス回転でなくてもよかったかもしれない。

玉瀬・脇本（2003）では「甘え」下位尺度と「甘えられ」下位尺度の間で $r=.32$ という相関値を得ている。一方、本研究では、「甘え希求」と「甘え受容」の間で $r=.17$ という相関値が得られている。この値ではバリマックス回転を行うのが適当であると考えられるが、試みに多元的「甘え」尺度において、プロマックス回転を行ってみた。結果的には、バリマックス回転とそれほどの違いは見られなかった。多少、因子負荷量の値が解釈に影響のない範囲で異なる程度である。尺度作成においては、様々な手法を試みる必要がある。その中で自らの解釈に最も適合する結果を導き出せばよいと考えられている（松尾・中村 2002）。

### 4. 2. 多元的「甘え」尺度と大学生用「甘え」尺度（玉瀬・脇本，2003）との相関

玉瀬・脇本（2003）と本研究の多元的「甘え」尺度において、「甘え」と「甘え希求」の間で $r=.44$ 、「甘えられ」と「甘え受容」の間で $r=.60$ の有意な相関が得られた。したがって、両尺度の相関は中程度のものであるとみなされる。玉瀬・脇本（2003）の「甘え」下位尺度は13項目、「甘えられ」下位尺度は11項目である。一方、多元的「甘え」尺度では、「甘え希求」と「甘え受容」の項目は、ともに5項目である。倍以上の項目数の違いを考えると、かなり効率よく「相互依存的甘え」を測定できていると考えられる。また、大学生に限らずより広い範囲の青年期の対象者に適用できる点でも活用の可能性は広がったといえる。

### 4. 3. ビッグ・ファイブとの関連



ビッグ・ファイブとの関連については、「甘え」の下位尺度ごとに際立ったものを挙げると、「甘え希求」と神経症傾向との間で $r=.27$ 、「甘え受容」と外向性との間で $r=.29$ 、「甘え歪曲」と神経症傾向との間で $r=.37$ 、さらに「甘え拒絶」と外向性との間で $r=-.30$ 、開放性との間で $r=-.36$ 、調和性との間で $r=-.47$ （いずれも0.1%水準で有意）の相関がみられた。

まず、「甘え希求」について考察する。この因子は神経症傾向との正の相関が有意で、かつ開放性との負の相関が有意であった。この尺度は、当初「健康的な甘え」を想定していたものであったが、結果からみて必ずしもそうは言いきれないようである。玉瀬・脇本（2003）では、「甘え希求」に相当する「甘え」下位尺度と「公的自意識」との間に有意な相関が認められている。誰かをあてにすることは、他者への意識が働くはずであり、「甘え希求」がかなり強くなると神経症的傾向が高まり、開放的ではなくなるのかもしれない。この尺度は因子分析の際、最もまとまりにくかった。それは「甘えたい」意識を的確に捉えることが難しいことを示唆している。今後、定義との関連を考慮しつつ、さらにより的確に「甘えたい」意識を捉えることが可能かどうか検討しなければならない。

次に、「甘え受容」について考えてみよう。この下位尺度は、神経症傾向、外向性、調和性と正の相関が見られた。神経症傾向については、先の「甘え希求」と同様の傾向であり、両者を合わせた「相互依存的な甘え」が神経症傾向と正の相関関係にあることになる。このことは、「甘え」意識が強くなると、神経症傾向を示すことになり、土居（2001, p.109）が示唆するほど「健康的なもの」とはならないのかもしれない。もちろん、健康的であるかどうかは量的にのみ規定されるものではないであろう。むしろ意識しない甘え方が問題にされるべきなのかもしれない。例えば、誰に対して、どんな時に、どのように甘えるのかを行動のレベルで捉えることも考えてみなければならない。甘えの場面による使い分けの問題は今後の課題として残しておきたい。さらに言えば、甘えの適切な表現というものは、むしろ非言語的な形で行われる可能性が高いように思われる。

「甘え受容」と外向性との間で正の相関が認められたことについては、この下位尺度がリーダーシップと関連することを示唆している。外向性は、社交的であると同時に他者に対して積極的、支配的でリーダーシップをとる傾向にあることが指摘されている（辻，1998）。「甘え受容」下位尺度の項目は、「相談にのってあげたい」「後押しをしてあげたい」など、相手に対して積極的にかかわっていかこうとする傾向を示している。「甘え受容」と調和性との関係についても、人と協調していかこうとする傾向を示すものであり、「外向性」と合わせて、人とよい関係を保とうとする傾向

があることを示唆している。

次に、「甘え歪曲」について考えてみたい。この下位尺度は、神経症傾向と正の相関、開放性と調和性とは負の相関関係にあった。この結果は、すぐに腹を立てたり、ふてくされたり、すねたりするような振る舞いをする人は、性格特性として神経症的で、閉鎖的で非協調的であることを示唆している。別の言い方をすれば、自分の怒りをうまくコントロールできず、ストレスへの対処が下手であるといえるかもしれない。本研究では「甘えたくても甘えられない際にかかる感情」を「甘え歪曲」因子とみなしている。この「甘えたくても甘えられない際にかかる感情」と神経症傾向、あるいは情動性との関係は田村・小川（1989）の研究においても指摘されている。

「甘え拒絶」に関しては、外向性、開放性、調和性のいずれとも負の相関関係にあった。また、それらの相関係数の値は、外向性、開放性、調和性の順に高くなっている。これは何を意味しているのであろうか。外向性についてはすでに述べた。開放性については、これが高いほど内的又は外的世界に対する好奇心の度合いが強いことを示している。調和性については、周囲に対する協調性の高さを表している。「甘え拒絶」下位尺度の項目は、土居（2001）の「一方的で要求がましい甘え」という定義を基にして作成したものである。これらの項目では、自分の側からは甘えたいという意識をもちながら、他者に対して「～してあげよう」という気持ちはなく、周囲と協調などしないということである。このような人が、外向的でなく、閉鎖的で、非協調的になることは容易に想像しうる。この「甘え拒絶」という概念は「甘え」に関する先行研究では取り上げられていない概念であり、さらに検討の余地がある。本研究では「甘え歪曲」と「甘え拒絶」を合わせたものを「屈折した甘え」とみなしているが、このような捉え方でいいのかどうか、なお検討を重ねなければならない。このことに関連して、谷（2000）は、土居（1971）の「甘え」を捉える尺度として、「直接的甘え」「屈折した甘え」「とらわれ」の3因子を見だしている。このように、より病理的なものを捉える場合には「とらわれ」を入れることもできるかもしれない。土居（1971）は「とらわれ」を甘えの病理として論じているが、同時にこれは森田神経質（森田，1960）を論じる際の主要な概念でもあり、その関連性については別に考えていかなければならないのではなかろうか。

最後に、ビッグ・ファイブの中で、誠実性については多元的「甘え」尺度のいずれの下位尺度とも関連が示されなかったことに触れておきたい。5因子研究における誠実性の解釈については、もともと「勤勉誠実性」とされていた。これは、「目的をしっかりとち、物事を合理的に無駄なく統制し、遂行する」「この要

素に欠ける者は怠惰で不誠実な人間である」などの内容を含んでいる。欧米で作られたビッグ・ファイブは、相互独立的な価値観がベースになっている。誠実性は欧米で培われた相互独立的自己観を反映しているのではないだろうか。このことは辻（1998）の5因子研究においても指摘されている。ただ、この因子については、あまり一貫した研究結果が示されていないようにも思われるので、今後の研究に俟たざるをえない面もある。

## 5. 要 約

「甘え」とは、土居によって提唱された日本人特有の対人行動や対人感情などを明らかにするための概念である。玉瀬・脇本（2003）はこの概念を基に大学生用「甘え」尺度を作成した。本研究では玉瀬・脇本の尺度を改訂し、「屈折した甘え」を追加して新たに多元的「甘え」尺度を作成した。多元的「甘え」尺度は、「甘え希求」「甘え受容」（これらは「相互依存的甘え」の尺度）、「甘え歪曲」「甘え拒絶」（これらは「屈折した甘え」の尺度）の4つの下位尺度（各尺度5項目、合計20項目）で構成されている。この尺度の累積寄与率は.45であり、Cronbachの係数は $\alpha = .72 \sim .80$ であった。

性格特性に関しては、NEO-FFI（短縮版Big5性格検査）を用いた。多元的「甘え」尺度と大学生用「甘え」尺度（玉瀬・脇本，2003）の相関は、「甘え希求」下位尺度と「甘え」下位尺度の間で $r = .44$ 、「甘え受容」下位尺度と「甘えられ」下位尺度の間で $r = .60$ であった。

多元的「甘え」尺度と性格特性（Big5）では、「甘え受容」と外向性、「甘え歪曲」と神経症傾向の間で有意な正の相関が、「甘え拒絶」と外向性、開放性、調和性の間で有意な負の相関が見られた。また、誠実性とは多元的「甘え」尺度のいずれの下位尺度とも有意な相関は見られなかった。Big5の5因子と多元的「甘え」尺度の下位尺度の内容を考えると、いずれも了解しうる結果であるといえる。

## 引用文献

- Allport, G.W., & Odbert, H.S. 1936 Trait names: A psycho-lexical study. *Psychological Monographs*, 47, (1, Whole No.211)
- Cattell, R.B. 1947 Confirmation and clarification of primary personality factors. *Psychometrika*, 12, 197-220.
- Costa, P.T.Jr., & McCrae, R.R. 1985 *The NEO personality inventory manual*. Odessa, FL: Psychological Assessment Resources.

- Costa, P.T.Jr., & McCrae, R. R.1989 *The NEO-PI/NEO-FFI manual supplement*. Odessa, FL: Psychological Assessment Resources.
- 土居健郎 1971 「甘え」の構造 弘文堂
- 土居健郎 1985 「表と裏」 弘文堂
- 土居健郎 1993 注釈「甘え」の構造 弘文堂
- 土居健郎 2001 続「甘え」の構造 弘文堂
- Eysenck, H.J. 1967 The biological basis of personality. III.: Thomas (梅津耕作・祐宗省三他訳 1973 人格の構造 - その生物学的基礎 - 岩崎学術出版社)
- 藤原武弘・黒川正流 1981 対人関係における「甘え」についての実証的研究 実験社会心理学研究 21,53-62
- Goldberg, L. 1990 An alternative "Description of Personality": The big-five factor structure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 59, 1216-1229.
- 北山忍・唐澤真弓 1995 自己：文化心理学的視座 実験社会心理学研究 35, 2, 133-163
- 北山忍・宮本百合 2000 文化心理学と洋の東西の巨視的比較 - 現代的意義と実証的知見 - 心理学評論 43, 1, 57-81.
- 木内亜紀 1996 独立・相互依存的自己理解 - 文化的影響、およびパーソナリティ特性との関連 - 心理学研究 67, 308-313.
- Markus, H.R., & Kitayama, S. 1991 Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- 松尾太加志・中村知靖 2002 誰も教えてくれなかった因子分析 北大路出版
- 南 博 1994 日本的自我 岩波書店
- 森田正馬 1960 神経質の本態と療法 白揚社
- 中根千枝 1967 タテ社会の人間関係 岩波書店
- Norman, W.T. 1963 Toward an adequate taxonomy of personality attributes: Replicated factor structure in peer nomination personality ratings. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 66, 574-583.
- 大迫弘江・高橋超 1994 対人葛藤自事態における対人感情及び葛藤処理方略に及ぼす「甘え」の影響 実験社会心理学研究 55-3, 184-188.
- 下仲順子・中里克治・権藤恭之・高山緑（訳） 1999 NEO-PI-R、NEO-FFI 日本版共通マニュアル 東京心理
- 篠原しのぶ 1997 日本及び中国における青年男女の「甘え」に関する調査研究 福岡女学院大学紀要 7, 167-193.
- 篠原しのぶ・原崎聖子 2003 青年の甘えと社会的適応に関する教育心理学的研究 - 日本・中国学生



- の比較を中心に - 福岡女学院大学紀要 人間関係学部編 4, 29-35 .
- 高田利武・松本芳之 1995 日本の自己の構造 - 下位様態と世代差 - 心理学研究 66, 3, 213-218.
- 高田利武・大本美千恵・清家美紀 1996 相互独立的・相互協調的自己観尺度(改訂版)の作成 奈良大学紀要 24, 157-173 .
- 高田利武 1999 日本文化における相互独立性・相互協調性の発達過程 - 比較文化的・横断的資料による実証的検討 - 「一般の日本人」と「自分自身」との差異 実験社会心理学研究 39, 103-113 .
- 玉瀬耕治・脇本真希子 2003 大学生用「甘え」尺度の作成に関する研究 奈良教育大学紀要 52 ( 1 ), 209-219 .
- 田村富美代・小川捷之 1989 自己受容と対人関係 - 自己受容尺度と「甘え言語連想検査」 - 横浜国立大学教育紀要, 第29集
- 谷冬彦 2000 青年期における「甘え」の構造 相模女子大学紀要 36A, 1-8 .
- 辻平治郎・藤島寛・辻斎・夏野良治・向山泰代・山田尚子・森田義宏・秦一士 1997パーソナリティの特性論と5因子モデル: 特性の概念、構造、および測定 心理学評論 40, 2, 239-259 .
- 辻平治郎(編) 1998 5因子性格検査の理論と実際 北大路書房